

原発苦闘 映像に 映像に

東電電力福島第一原子力発電所事故による放射能汚染を懸念する農家の姿を映像にとり、また、福島県産米の映像制作が始まった。苦闘しながらの放射能汚染ゼロに農家を導く。制作資金は「カンパによる市民プロジェクト」を呼び、多くの農家、消費者共感の「組」が、12月完成を目指す。

福島の米作り
12月完成めざす

製作費募り思い共有

舞台は中通りに位置する、農業を諦めたよと、米作りの山間地、キキ、嘆く農家もいた。同研究ユニット、作品を手掛ける。金は金、食味鑑定、機軸通しの原村政樹監督と米米栽培研究会が制作委員会を結成した。米を作りたくて、何としても、昨年、原発事故で、中、土壌改良材で米への田んぼは汚染され、それまでの努力が水の泡になるかもしれない危機に臨む。手探りでカリウムやセ



里山の湧流水を採取して水の放射能汚染を調べる福島県天栄村の農家（仮映画社提供）

管は、今秋、農家が消費されるに直接受けて理解を求め、活動まで撮影した」と意気込む。製作に映には100万円が必要で、制作委員会は「カンパを募りたい。自分たちが作った

東日本大震災原因究明へ海洋研究開発機構（神奈川県横浜）の地球深部探査船「ちきり」(約5万6700トン)が宮城県牡鹿半島の約2200mで、東日本大震災をたらしめた巨大地震のメカニズムを探るため、震源断層に向けた作業を進めている。地震後、間もないプレート断層、境界の断面(海底)を掘り、調査は世界初の試みで、調査は

映画は消費の末端まで追跡する。昨年、農家の努力で放射能汚染をゼロに近づけた米だが買わない消費者もいた。原村監督は、



海産物用のパイプを積み立てる船員ら(宮城県牡鹿半島沖2300mの「ちきり」船、代表撮影)

福島に植物工場を

新産業文化創出研究 セミナーで概要 安全PR、雇用も

ネスモ
設置時
体や企
ていく

四季 2013・5・31
農業や自然、環境をテーマにドキュメンタリー映画を撮り続ける原村政樹監督が福島県天栄村の里山でカメラを回し始めたのは2009年の暮だった。里山の水田は放棄され、雑木も生えていた。米・食味分析鑑定コンクールの国際大会で金賞を受賞した天栄米栽培研究会の仲間21人が、このままにしておくには忍びない、復田に挑む。これを安全で日本一おいしい米作りの里に戻そう。米作りプロの浩秀にも関わる。そんな気持ちだった。原村監督のカメラは丹念に再生の過程を追い続けた。実りの秋、稲刈りに歓声を上げる小学生たち。メンバーの顔に満足感もみちみちる。監督をかすめることもなかった。11年3月、東京電力福島第一原発が爆発。70m離れた同村にも放射性物質が飛散した。のどかな田園は一転して緊張の日々。米作りができるのか。春作業準備も迫る中、必至に汚染対策の情報を集める。カメラは苦闘の日々に向き合った。その年の秋、コンクールで再び金賞を受賞。放射能ゼロの米を目指すメンバーのゆるぎない決意が爽り、努力が報われるはずだった。だが保証付きの安全な米が売れる村。開いた。放射能汚染に立ち向かった農民の物語だ。